

特集

医療法人社団清永会

矢吹病院に学ぶ腎臓病専門病院のかたち

地域に根ざした腎臓病専門病院として
患者さんに信頼される医療を提供

- **学会 会長に聞く** 第25回日本臨床工学会
会長 井福武志先生
(社会医療法人 雪の聖母会 聖マリアヘルスケアセンター本部長、
公益社団法人 日本臨床工学技士会 副会長)
- **学会報告** 第18回日本アクセス研究会学術集会・総会
ニプロ・グッドマン共催ランチョンセミナー
- **講演会** HDFをテーマに鹿児島で血液浄化技術講習会

地域に根ざした腎臓病専門病院として
患者さんに信頼される医療を提供

医療法人社団清永会(矢吹清隆理事長、山形市)は「可能性を信じる医療」の理念のもと、矢吹病院、本町矢吹クリニック、天童温泉矢吹クリニックの3つの透析施設で、質の高い透析療法に取り組んでいます。具体的には、全部署が一丸となって患者さんに信頼される医療の提供に尽力、腎障害の精密検査、進行予防と治療、慢性腎不全の透析治療、腎移植の情報提供と移植後の経過観察などを行う腎臓病専門病院です。矢吹病院院長の矢吹清隆先生、副院長の政金生人先生をはじめ、各部門の方々へのインタビューから、透析医療施設の一つの形を探ります。



理事長・院長 矢吹清隆先生

移転新築で「可能性を信じる医療」を実現
患者さん、職員の幸福を目指します。

2013年に創立80周年を迎えた当院は、外科専門病院として、一般外科や外傷の治療を中心に救急患者を受け入れてきました。その後、1977年人工腎透析室を設置して血液透析治療を開始し、1979年に現病院名に改称しました。2001年には透析センター49床を開設、腎臓病専門病院として地域のニーズに応え、患者さんに信頼される医療に取り組んでいます。透析患者さんの増加に伴い、2004年天童温泉矢吹クリニック、2008年矢吹嶋クリニックを開院し、3施設が連携、電子カルテで情報を共有して、500人を超える透析患者さんの幸福のために「可能性を信じる医療」を追求しています。

矢吹病院は施設の老朽化や駐車場スペースの拡大、効率的な病棟運営のため、2014年12月、山形市西部の嶋地区に移転しました。新病院建設の基本的な考えは、▽安全で安心な信頼できる▽職員が働きやすい▽充実した教育、研修ができる▽時代のニーズである女性の働きやすさを意識した構造・居室▽経済性が高い▽社会貢献・情報交換です。それによって温かみのある透析医療を実現したいと考え

ました。東日本大震災の経験を生かし、自家発電装置、大型貯水槽を設置し、災害時にも透析室、外来、病棟を含むすべての機能が維持できるようにしました。透析患者さんの幸福のためには、良い透析、運動、食事が大切です。新病院にはレストランカフェを設置、減塩食や低カリウム食などを実際に食べていただきながら、栄養士が指導できるようにしました。県内外からのシャントトラブルの透析患者さんに対しては、バスキューアクセスセンターを新設し、迅速な診断と治療ができるようにしています。

患者さんの幸福とともに職員も幸福を感じることができれば、働く意欲につながります。山形県は三世帯同居率や女性就業率が高い県ですので、「息抜き」ができることが大切だと思います。2年に一度国内外の透析施設視察を兼ねた旅行、育児や学会参加への支援、短時間正社員制度の導入などに積極的に取り組んでいます。育児休暇を取りやすい職場になるよう配慮しており、職場復帰しやすい環境を整備しています。



施設概要

診療科目：内科、外科、腎臓内科、整形外科、消化器科、心療内科、リハビリテーション科
 専門外来：腎臓病専門外来、食事療法外来、腹膜透析外来、バスキューアクセス外来、移植外来、消化器内科外来、女性外来、禁煙外来
 病床数：40床(10対1入院基本料) / 透析ベッド数81床
 住所：〒990-0885 山形県山形市嶋北四丁目5-5
 TEL：023-682-8566(代) URL：http://www.seieig.or.jp/
 関連施設：本町矢吹クリニック、天童温泉矢吹クリニック、くわのまちデイサービス、居宅介護支援事業所

患者さんの愁訴に基づく透析医療を目指した
愛Pod計画を実践し、病院の理念を実現しています。

副院長 政金生人先生

当院では、2005年5月、患者さんの愁訴(自覚症状)に基づく透析医療を目指そうと「愛Pod(あいぽど)計画」を考案し、実践しています。これは、透析の質は透析患者さんのQOLに深く関連し、透析患者さんのQOLは生命予後を決する重要な因子であるという前提のもとで、患者さんにとって楽な透析を目指そうというものです。その取り組みの中で分かったのは、患者さんが透析方法によって自分の愁訴に変化があるということに気が付くことが、患者さんの自立に重要だということです。ドライウエイトの設定や透析時間、回数、ダイアライザの選択、HDFの細かな条件などを、患者さんと医療者が相談の上で決め、患者さんが実際に体験することで、「やらされている透析」から「自ら選択して行う透析」に変化し、創意工夫することができます。愛Pod計画は透析患者さんと医療者がパートナーとして、互いに自立した存在として共に歩いていこうという共同宣言と言えるでしょう。

具体的には、半年に1回透析患者さんの愁訴と栄養状態を体系的に評価しています。自覚症状調査(愛Pod調査)は、



血液透析患者さんに透析中の症状や日常生活について調査します。普段気になる様子や透析について、食生活、日々の気分など全20項目を5段階評価、点数が低いほど愁訴が少ないと判断します。全患者さんへの対策やコメントを記入した調査結果をフィードバック、前回の調査結果と比較して介入効果を評価します。栄養状態評価(MIS調査)は、治療プランを作成しやすいように一部改変した透析患者専用の自覚的栄養評価表(MIS)シートを使い、栄養状態を3群に分類、栄養障害の原因と今後の対策検討に活用します。

愛Pod計画の根底には、高齢者腹膜透析の第一人者である平松信先生(岡山済生会総合病院)の「患者さんの中にある生きる力を引き出すこと。患者さんの訴えの中に医療がある」という考えがあります。それが当院の理念である「可能性を信じる医療」につながるのです。週3回、長期間にわたる透析現場は人と人とが真剣に向き合う場であり、まさにヒューマンウォッチングです。患者さんが、透析方法を自分が選び取ったものとして自ら工夫していくことが大切であり、必要以上に干渉することはないと考えています。



透析センターでは専門のスタッフたちが、より良い透析ライフを支援しています



- よい透析とは透析中血圧が下がらず、痛み、かゆみ、イライラ、不眠などの不快な症状がない状態と定義します。
- 愛Podとは患者さん(Patient)の訴えに基づく(oriented)、透析(dialysis)のことをさします。
- よい透析を達成するために努力を惜しまない透析医療を(愛Pod)と呼びます。
- そのためには、透析スケジュールや透析条件、HDF療法などをいろいろ工夫する必要があります。
- データありきの医療ではなく、愁訴のない透析にはどのようなメカニズムがあるのかを解析します。
- 清永会は愛Pod実践のために、今後も一層の努力をすることを宣言致します。

(2005年5月)

副院長
伊東 稔先生



谷田秀樹先生



最先端の治療技術と、在宅透析など多様な透析療法で患者さんのより良い透析ライフをサポートします。

「可能性を信じる医療」の理念のもと、チームで質の高い透析療法を提供しています。そのためには最先端の治療技術を積極的に取り入れたいと考えています。とくにオンラインHDFは透析関連合併症予防効果が期待されます。痒み、色素沈着、イライラ感などの自覚症状を改善させる効果もあり、愁訴のない透析を目指す上で重要な選択肢の一つとなっています。地域でオンラインHDFを導入している施設が少ないこともあり、オンラインHDFを希望する患者さんが他施設から来られることがあります。

当法人には3つの透析施設がありますが、どの施設でも同じように質の高い透析療法が受けられるように努めています。患者さんの愁訴は多種多様です。診療報酬上、透析回数には一定の制限があります。しかし、患者さんにとっ

て愁訴のない快適な透析を提供するために、可能な限り時間や回数も考慮した透析療法を考えていきたいと思えます。その一つとなるのが、在宅血液透析です。

在宅血液透析では長時間・頻回透析が可能です。現在、当院で管理している在宅血液透析患者さんは9名いらっしゃいます。トレーニングにとても時間がかかった患者さんもいました。自己穿刺、介助者の協力などのハードルがありますが、何よりも新しい治療に挑むには勇気が必要です。長時間、頻回透析のメリット、個人個人の生活に合わせて自宅で透析治療ができる魅力を知ってもらいたいと思います。そして、在宅血液透析を希望する患者さんが安全に在宅血液透析が行えるよう支援体制を整えていきたいと考えています。

声にならない愁訴を聞き取り、患者さんにベストな透析方法を考えます。

臨床工学部
鈴木則雄さん
(透析技術認定士)



透析室では、臨床工学技士と看護師がチームで、患者さんの訴えに基づく透析「愛Pod」に取り組んでいます。患者さんとの会話からは、痛い、痒いなどしか分からないため、体格調査や愛Pod調査で声にならない愁訴を聞き取り、患者さんにベストな透析方法を考えるようにしています。これは、ダイアライザなどの性能だけを見ては分からないことです。現在、臨床工学技士は11名、法人全体では約30名です。看護師が充足したことで、シャントなど透析状態を常にチェックし、技士本来の仕事を見直せるようになりました。愁訴に応じたダイアライザの選択や性能評価などを責任もって行い、やりがいを感じています。学会発表に向けて一人一つのテーマを年間を通じて研究するなど、スキルアップは欠かせません。

“継続”できる指導を心がけ、ジェネラリストとして愛Pod計画に取り組みます。

透析室看護師長
縄 広美さん



矢吹病院透析室の治療方針は「よく食べて、よく動き、透析で取る」ですので、制限の一点張りにならないように、“継続”できるように食べる量やタイミングなどを指導するようにしています。患者さんとのコミュニケーションでは、個別性に合わせた対応をして信頼関係を築いています。透析を担当する看護師は12名、看護助手3名、中にはフットケア指導士や透析看護認定看護師もいます。中途採用者が多いのが特徴です。他科を経験している中途採用者にはいろいろな経験がありますので、腎臓単科の当院にとっては組織を活性化させ、知識のアップにつながります。違う環境に置かれることで、違う視点で物事を見ることができるのです。スペシャリストも大切ですが、ジェネラリストであることが愛Pod計画では必要だと感じています。

アクセスセンターが良いバスキュラーアクセスを守ります。

小鹿雅隆先生



良い血液透析を行うためには良いバスキュラーアクセス(以降アクセスと略します)が必要不可欠で、その維持管理は大変重要です。アクセスセンターでは、アクセスの新規作成から修復・維持管理に至る全ての治療を行っています。近年、高齢化や透析歴の長期化、糖尿病を有する患者さんが増加し、アクセスも多様化しています。患者さん個人の状態にあった最良のアクセスの提案ができるよう努めています。また、閉塞や感染といったトラブルによる緊急事態には特に迅速に対応できるよう心がけています。手術は約半数を占める経皮的血管拡張術(PTA)やシャント作成、シャント血栓除去など多岐にわたりますが、その多くは日

帰り手術が可能となっています。2014年は月平均60件の症例があり、内4割が他施設からの紹介患者さんでした。アクセスに対する意識はそれぞれの施設によって異なりますが、良いアクセスで良い透析を行い、異常の早期発見早期治療でアクセスを長持ちさせるという基本は同じだと思います。現在、アクセス担当医は私だけですが、今後のためにも次世代を育てる必要性を感じています。

法人と職員、地域とのつなぎ役

企画情報部 志賀雅彦さん

私たち企画情報部は2013年3月に発足した新しい部署で、法人イベントの企画や会議の事務局、職員研修などの企画・運営、ホームページ管理やパンフレット・院外広報誌作成などの対外広報活動をしています。法人内のさまざまな部署と関わっていく中で、法人全体にうまく情報が伝わっていないことが分か

り、職員向けの広報誌発行を検討しています。また、移転先の新しい地域に矢吹病院をより知ってもらえるよう、今年は「病院まつり」を開催する予定です。たくさんの方に楽しんでもらえるようなお祭りを企画しています。清永会と職員、地域の皆さんをつなぐのが私たちの役目だと考えています。



企画情報部兼事務部係長の志賀雅彦さん(中央)と皆川未吏さん(左)、萩谷美登里さん

「カフェレストランから健康発信」



健康栄養科
清野由美子さん

健康栄養科では、新設されたカフェレストランを活用して「食事健康」と患者さんだけでなく、家族そして地域の皆様へ栄養情報発信に取り組んでいます。その一つは、ランチタイムに栄養士がカフェに常駐し、食事療法や減塩の工夫について、一緒にランチをしながら情報交換する「栄養士とカフェランチ」です。実際食べて、味わって、食事療法は難しいとあきらめず、できることからやってみようかなと思っていただけたらと願っています。また、透析食も少しの工夫で美味しい！の栄養指導ができるように、栄養科スタッフは毎月のテーマにそって、献立を作り実際調理し、その料理の写真提

出を課題としています。栄養指導が栄養成分や数値だけでなく、食事として季節感や盛り付



け、調理の工夫など具体的な食事栄養指導に結びつけるために、忙しさに負けないで調理やカメラ技術にも研鑽を惜しまない若手栄養士の姿は頼もしく思います。

「食事で健康に」一。私たち職員が元気でなければ患者さんを守ることはできません。若いから、忙しいからと食事を気にしない職員にも、カロリーや塩分表示などの栄養情報や、食事についてのプチ知識を職員カフェに提示することで、食事に関心を持ち、良い食習慣を身に付けてほしいと願っています。

食習慣は大きな改革より、小さな改善をコツコツ積み重ねていくことが大切なのであります。

(2014年11月18日、25日矢吹病院にて)